

聖書：マタイ 8：1～4

説教題：わたしの心だ、きよくなれ

日時：2018年12月2日（朝拝）

5～7章までイエス様の「山上の説教」が記されましたが、それが終わり、ここからしばらくはイエス様のみわざが記されて行きます。1節に「イエスが山から下りて来られると、大勢の群衆がイエスに従った」とあります。山の上はある意味で天国の世界。天の御国についての教えが語られ、まさに天国を思わせるような世界でした。しかしそこから降りて来た途端に、この世の現実に戻されるかのような出来事が起こります。2節に「すると見よ。ツアラアトに冒された人がみもとに来て、イエスに向かってひれ伏し」とあります。「ツアラアト」という言葉はクリスチャンでないほとんど知らない言葉だと思います。新改訳では第3版以降、この訳語が登場しました。以前は「らい病」と訳されていました。なぜ変わったかと言えば、それは聖書が述べるこの病に「らい病」という言葉を当てはめるのは不適當であることが分かって来たからです。この病についてはレビ記 13～14 章に出て来ますが、何と言ってもらい病と違う点は、それが人間の体ばかりでなく、衣服や家屋にまでも及ぶという点です。新改訳聖書巻末のあとがきには、このツアラアトについて次の説明が載っています。「聖書のツアラアトは皮膚に現われるだけでなく、家の壁や衣服にも認められる現象であり、それが厳密に何を指しているのかはいまだ明らかでないからである。」

このツアラアトについて聖書から分かることは、何らかの原因により、皮膚に腫れ物、かさぶた、光る斑点ができて、その患部が皮膚より深く見える状態になるということ。そしてそれはだんだん広がりやすいことです。この病気にかかったモーセの姉ミリヤムは「雪ようになった」と言われていますし、それを見たモーセの兄アロンは「肉が半ば腐って母の胎から出て来る死人のよう」と表現しました。そして詳しいことは分かりませんが、そのしるしは何と衣服や家の壁にさえも現われました。そのように感染し、広がるものであったということでしょうか。このため、この病にかかった人は人々から隔離され、町の外で寂しく暮らさなければなりません。レビ記 13 章 45 節 46 節：「患部があるツアラアトに冒された者は自分の衣服を引き裂き、髪の毛を乱し、口ひげをおおって、『汚れている、汚れている』と叫ぶ。その患部が彼にある間、その人は汚れたままである。彼は汚れているので、ひとりで住む。宿営の外が彼の住まいとなる。」

病気になることはつらいことです。様々な不安や心配が頭をよぎります。そんな時にそばで支えてくれる人がいればまだ耐えることができます。ところがこのツァラアトに冒された人の場合、周りの人々は恐怖感を覚えて、みな離れ去っていきます。呪われた者・汚れた者とされ、社会的・宗教的にも疎外されます。そして人々が触れて汚れることがないように、自分から「汚れている」「私は汚れている」と叫んで人々に注意喚起しなければならない。それは何という言語に絶する世界に置かれることを意味したでしょうか。

そんなツァラアトに冒された人が突然現われて来ました。私たちは差別は良くないことを知っていますが、もしその人が、たとえばこの場所に入って来たらどうでしょう。皆が一斉に立ち上がり、その人から少しでも離れた場所に移動しようとするのではないのでしょうか。このツァラアトに冒された人は、必死になってここまで来ました。きっとここに来るまで色々なことがあったと思います。人々から軽蔑され、忌み嫌われ、非常識な奴だ！と怒鳴られる。当時の書物の中には「多くの人々がツァラアトに冒された人を見て逃げ去る中、私は勇敢にも石を投げつけて、彼を追い払ってやった」と記されているものもあるそうです。しかし彼はそれら一切を振り切ってイエス様のみもとに来て、ひれ伏して言います。「主よ、お心一つで私をきよくすることがおできになります。」この彼とイエス様とのやりとりの記事において特に注目すべきポイントが二つあると思います。

まず注目したいのは彼の言葉です。彼はイエス様には自分の病をいやし、きよめる力があることは信じていました。彼はイエス様がこれまでに様々な病気の人を治したことについての話を聞いていたのでしょう。4章23～24節：「イエスはガリラヤ全域を巡って会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、民の中のあらゆる病、あらゆるわずらいを癒やされた。イエスの評判はシリア全域に広まった。それで人々は様々な病や痛みに苦しむ人、悪霊につかれた人、てんかんの人、中風の人など病人たちをみな、みもとに連れて来た。イエスは彼らを癒やされた。」そこにはツァラアトに冒されていた人の癒しはありませんでしたが、彼はイエス様にはこの自分の病をもきよめることができると信じた。

しかし彼の言葉の中でカギを握るポイントは「お心一つで」と訳された部分です。これは直訳すれば「あなたがお望みくださるなら」というものです。あるいは「あなたが

意思してくださるなら」ということです。彼はイエス様にツアラアトをきよめる「力」があることは信じています。しかし彼にとっての問いは、イエス様は果たしてこの自分のツアラアトのきよめを意思してくださるのか、それをご自身の心としてくださるのか。そこまでの確信はない。これは自分自身をわきまえた表現と見ることもできます。彼はイエス様に押し付ける言い方はしていません。主権はイエス様にあります。自分のツアラアトをきよめてくださるのも、きよめてくださらないのも、イエス様のお心一つです。そういう彼にとっての一抹の不安は、果たしてイエス様はこの汚れた私のきよめをご自身の御心してくださるかということ。その力はあるが、私に対して、そのようなお心を持ってくださるのかどうかということです。

そんな彼に対するイエス様のお答えは素晴らしいものでした。3節：「わたしの心だ。きよくなれ。」ここで「わたしの心だ」と訳された言葉は、直訳すれば「わたしは望む」とか「わたしは意志する」です。つまりこれは2節のツアラアトの人の言葉にそのまま呼応しています。彼が「もしあなたがお望みくださるなら、云々」と語ったのに対し、イエス様はまず「わたしは望む」と言われた。「もしあなたが意思してくださるなら」と問うたのに対し、「わたしは意志する」と言われたのです。ここに私たちが今日、良く思い巡らすべき真理があると思います。私たちは自分を見る時に恐れを抱きます。果たして神はこんな罪に汚れた私のことなど、もう何も考えてくださらないのではないか。救おうとする御心など持たしてくださらないのではないか。このツアラアトの人の話は実は私たち一人一人のことです。神の御前における私たち全員の状態です。頭のとっぺんから足のつま先に至るまで罪という病におおわれ、自分で自分を救い出すことができない、どうしようもない状態にある私たち。確かに神は神として、しようと思えばどんな人をもきよめ癒すことができるでしょう。しかし問題は果たして神はこのような全身汚れた状態にある者が救われることをご自身の御心としてくださるのか。それを意思してくださるのか。ここに示されているメッセージは、神はそれを意思してくださるということです。ご自身の願いとしてくださるということです。そして私たちの救いのために行動してくださる。これは自分の汚れを知るすべての人にとってのこの上ないグッド・ニュースではないでしょうか。

これは他の箇所でも語られている真理です。Ⅰテモテ2章4節：「神は、すべての人が救われて、真理を知るようになることを望んでおられます。」ヨハネ6章37節：「わたしのもとに来る者を、わたしは決して外に追い出したりはしません。」Ⅱペテロ3

章9節：「(主は) だれも滅びることがなく、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。」

そしてもう一つ今日の箇所注目すべき大事な点は、イエス様が彼をきよめる際に、手を伸ばして彼にさわってくださったということです。イエス様はこの御業をするのに必ずしも手で触る必要はありませんでした。来週見る5節以降の記事で、イエス様は百人隊長のしもべを癒される際、手で触れず、ただお言葉によって癒されます。おそらくツアラアトの人がやって来た時、人々は見つめてウワーっと言って一斉に脇に飛び退いたに違いありません。イエス様もその時、一緒に飛び退きながら、少し離れた位置から「わたしの心だ。きよくなれ！」と言ってきよめることもできた。しかしイエス様はあえて彼にさわられました。ここにイエス様の深いあわれみのお姿を見ます。このツアラアトに冒された人は、長い間、健康な人と触れることはなかったと思います。そんな彼にとって誰かに触れられるということは、どんなに大きな意味を持っていたことでしょう。そのことをご存知のイエス様が、こうして彼に触れながら、この御業をなさったのです。

しかしさわられる方は良くても、さわる方にとってはある意味で犠牲が伴います。皆さんは汚い物に触るのが得意でしょうか。前に奉仕していた教会では会堂の前に車を停めておくと、しばしば鳥がその上に糞をしました。外に出るため、会堂のカギを締め、車に乗り込もうとすると、ボンネットや窓ガラスに糞が多量にベトリ付いている。私は車の中に置いてあるティッシュで何とか拭き取ろうとします。ところがティッシュのあちこちを使っているうちに思わず手についてしまうことがあります。すると私は心の中では悲鳴を上げながら急いでそれを処理して念入りに手を洗うわけです。鳥インフルエンザにかかってしまったらどうしようかなどとビクビクしながら。

イギリスの元皇太子妃、交通事故でなくなったダイアナ妃は生前、エイズ患者の支援活動もしていたようで、そんなダイアナ妃がある時、エイズに感染した患者を見舞い、手袋をせずに握手をして激励した姿が報道された時がありました。まだエイズはさわらなくても移るのではないかと恐れられていた時でした。そんな中で手を差し出し、その人に触れ、自ら握手したその姿は非常に衝撃的な姿として多くの人の目に留まったと言われます。イエス様のこの時の姿もそのように、いやもっと衝撃的なものであったに違いありません。人々が顔色を変えて、この人のそばから飛び退こうとする中、イエス様は彼から逃げ去らないばかりか彼に触れて下さった。これは単なるパフォーマンスでは

ありません。人間はみな汚い物を嫌がりますが、神である方はこのように関わって下さる。イエス様は彼のきよめを心から願う方として、自分自身が汚れた者となることも厭わず、きよい手で彼にさわり、病んでいる彼とご自分とを一つにつなげて下さったのです。

そしてこのアドベントの時に思うことは、このイエス様の姿はまさにこのクリスマスの出来事と一つに重なっていることです。イエス様は本来、聖なる神の一人子として、天の栄光ときよさの中にとどまっていれば良かった。しかしイエス様は父なる神と共に、全身罪でおおわれた私たちの救いをご自身の願いとし、御心としてくださって、ご自身をへりくだらせ、汚れた私たちのところに来てくださいました。そしてそのきよい手で私たちに触れてくださり、代わりに私たちの汚れと痛みとをご自身に引き受けてくださったのです。そのイエス様の歩みが最後に行き着くのはあの十字架刑です。イエス様はそうにして、私たちの重荷を代わりに担う方として、ご自身の聖さと引き換えにして「わたしの心だ。きよくなれ」と言ってくださる。そしてご自身のもとに来る者たちを聖め、新しい者に造り変え、神とともに歩む永遠のいのちの祝福に生かしてくださいます。

イエス様は4節で「だれにも話さないように気をつけなさい」と言われました。これはご自身の働きが誤解されないためでしょう。ただ奇跡を行う英雄と見られて、そういう意味での救い主と誤解されるのを防ぐためです。イエス様はある人々がするように癒しや奇跡を伝道の道具や宣伝文句にはされませんでした。不思議な奇跡を行なってこの世のご利益を与える救い主でなく、十字架に至る歩みを通して、より根本的な罪の問題から人々を救い出す救い主であることを人々が知るように、その妨げを除こうとされたのです。そして彼には「ただ行って自分を祭司に見せなさい。そして、人々への証しのために、モーセが命じたささげ物をしなさい。」と言われました。これは彼が社会復帰し、きよめられた人として早くに生活できるようにとのイエス様の配慮から出た言葉だったと考えられます。

私たちにとって今日の箇所はどのような意味を持っているのでしょうか。今日の箇所の意味が本当に分かるために必要なことは、このツアラアトの人とは自分のことだと知ることです。神の前に救いようのない自分であること、全身罪という不治の病におおわれて、汚れていて、どうしようもない者であること。しかしそんな私たちの癒しと聖めを

イエス様はご自身の願いとしていてくださる。そしてそのきよい手をもって私たちに触れてくださり、私たちを聖め、新しい者としてくださる。私たちはこのような恵み深い主を見上げて、恐れることなく、汚れた自分を主の前に持って行き、その御心の通りにきよめていただく幸いにあずかりたいと思います。そしてこのクリスマスの時、まさにこの思いを持って私たちのただ中へと入って来て下さった主を礼拝し、この方を迎え入れて、この方において差し出されている神の大きなあわれみと救いに生かされる者でありたく思います。